

保育者養成における「ひと・もの・こと」に出会う  
体験型学習プログラムに関する実証的研究(6)  
——附属保育園体験実習における学生の学び——

近藤千草\*・箕輪潤子\*\*  
菅井洋子\*\*\*・内海崎貴子\*\*\*\*

An Empirical Study on the Learning Program for Child-Care Givers-  
Based on Experiences of Interaction with People, Things and Events-(6)  
A Student's Learning for Experience Training in Attached Nursery School

Chigusa KONDO, Junko MINOWA, Yoko SUGAI, Takako UCHIMIZAKI

要 旨

本稿では、幼児教育学科に位置づけられる初年次専門独自科目である「幼児教育体験学習」(通年・必修)の一プログラムである「附属保育園体験実習」に焦点を当て、学生は初めての実習でどのようなことを学んでいるのか、実習終了後に学生が提出したレポートから探ることを目的とした。レポート課題は3課題あるが、本稿では第1課題、「子どもたちと触れ合った感想をまとめる」より学びの実態を捉えた。

分析の結果、学生は主として「学生自身と子どもとのかかわり」、「子どもの動き」、「遊びの様子」、「言葉の獲得」、「心身の発達」という5つの着眼点を持っていることがわかった。学生は実習の中で様々なかかわり方を試み、コミュニケーションが取れたことに対して「喜び」として記述しているが、一方、思ったように関われない場面や、予想とは異なる反応に「戸惑う」場面も記述され、イメージしていた保育とのギャップも認識し始めた様子が伺えた。このように多様な子どもへの気付きは、保育者としての視点獲得につながる可能性が示唆された。

キーワード：保育者養成、体験型学習、保育園実習

---

\*講師 教育学

\*\*准教授 児童学・保育学

\*\*\*講師 発達心理学・保育学

\*\*\*\*教授 教育学

## 1. はじめに

保育者養成に関する体験型学習プログラムとして、本学科の独自科目である「幼児教育体験学習」が2010年度（選択必修科目・半期）より編成を重ねて本格始動し、現在（必修科目・通年）も多様な「ひと・もの・こと」に出会うプログラムを進行している。昨年度の実施報告では、体験型科目を通じた教員の意識変化について（箕輪他，2012）、2010年度実施の園芸活動と飯盒炊爨について（菅井他，2012）、2011年度プログラム実施に関する教育方法の検討について（草信他，2012）、2011年度の栽培活動の実態について（近藤他，2012）、2011年度の工芸体験について（葉山他，2012）の検討を各学会（全国保育者養成協議会，日本教育方法学会，日本乳幼児教育学会），および「報告書」（2012），川村学園女子大学研究紀要（2012）においてすでに報告してきた。プログラム内容にはその他，清掃活動，保育教材の作成，外部講師による講演会等多様に用意したが，その中の一つに「附属保育園体験実習」も位置づけられている。そこで，本稿では，附属保育園体験実習に焦点を当て，プログラム実施の意義について検討を試みたい。

附属保育園体験実習は，学生が大学に入学して初めて子どもたちや保育者と接する機会となる。そこで，実習の目的を「子どもたちと触れ合う経験をする」と広義に設定し，今後の実習に続く先駆け的体験として位置づけた。学生は，2日間という短い期間の実習で何を見，何を感じ，何を考えたのだろうか。すでに体験実習を終了した2011年度1年生を対象とし，課題として提出されたレポート記述から，体験実習を通じた学生の「気づき」について明らかにし，今後続く実習指導への示唆を得たい。

## 2. 研究方法

本稿では，2011年度に実施した附属保育園体験実習を対象とし，実習を通して得た学生の「気づき」を検討することとする。分析方法は，実習終了後に学生が提出したレポートの記述から，類似する意味内容を抽出分類し，その傾向を分析する。実習の実施内容は表1の通りである。

表1 附属保育園体験実習 実施概要

概要	詳細
実習の目的	①子どもと触れ合う経験をする ②保育士の仕事を見る・知る。 ③今後の学習に実習体験を生かす。
実習期間	2011年7月25日～9月20日 一人2日間
配属	1歳児～5歳児のいずれかのクラス 計：86名 1歳児：17名 2歳児：16名 3歳児：19名 4歳児：18名 5歳児：16名
課題	レポート課題 課題1：子どもたちと触れ合った感想をまとめましょう。 課題2：保育士の仕事について気付いたことをまとめましょう。 課題3：実習を体験して、今後どのような学習をしていきたいかまとめましょう。
分析対象と方法	レポート課題1を分析対象とする。 回収レポート（85枚）による類似記述内容のカテゴリー化

### 3. 結果

#### 3-1 体験実習を通じた学生の気付き

レポート課題1で記述された意味内容を分類すると、学生は、体験実習の中で5つの着眼点を持っていたことがわかった。すなわち、①「子どもの動き」、②「遊びの様子」、③「言葉の獲得」、④「心身の発達」、⑤「学生自身と子どもとのかかわり」についてである。本稿では、特に多くの記述を得た⑤「学生自身と子どもとのかかわり」を詳細に検討していくこととする。①から④については、その代表的な記述例を示したい。

表2は、「子どもの動き」についての記述例である。学生は、各年齢特有の多様な動き、すなわち、運動能力（全力疾走、活発）、基本的生活習慣（布団を敷く、トイレや着替え）、対人行動（手をつなぐ、輪に入らず）、遊びにおける動き（ジャンケン）、保育者の指示を受けた際の動き（きちんと行動、ちゃんと理解）、等に気がついていた。

表2 ①「子どもの動き」について記述例

<p><b>1 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆皆人なつっこくてとてもやんちゃ</li> <li>◆頑なに動こうとしない</li> <li>◆人見知りをしてなかなか寄ってこれない子もいた</li> <li>◆なかなか足がオムツに通らなかった</li> <li>◆まだ保育園に入ったばかりの女の子はとにかく一日中泣いていた</li> <li>◆スプーンを斜めにしてこぼしちゃう子</li> </ul>
<p><b>2 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆大人の人を借りながらではあるが自分で排泄したり、服を着たり脱いだりすることができたりしていた</li> <li>◆食事の時も自分でスプーンを使って大体食べることができていたがまだ保育者の援助が必要であり、ご飯を寄せたりするなどの「あつまり」をしたりしていた</li> <li>◆「出来ない」とだだをこねる子もいた</li> <li>◆体を動かすのがとても楽しそう</li> <li>◆友達同士協力しながらとても高く積み上げている</li> <li>◆話しかけても逃げてしまう子</li> </ul>
<p><b>3 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆こちらに全力疾走してくる</li> <li>◆靴下が履けず泣いている</li> <li>◆自分で布団を敷いていた</li> <li>◆とにかく子どもたちが元気すぎる</li> <li>◆泣いてしまう子はほとんどいなく</li> <li>◆ずっと手をつないでいる</li> <li>◆みんなの輪に入らず隅っこにいた</li> <li>◆着替えなどが自分で出来る</li> <li>◆3歳児でも長時間集中できる</li> </ul>
<p><b>4 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆4歳児は終始元気</li> <li>◆昨日（1日目）は出来ていなかったことが次の日（2日目）になると出来ていたり</li> <li>◆基本的なことはもう一人で出来ていて</li> <li>◆とても自由で活発的な行動をする子が多かった</li> <li>◆決まり事があったが子どもたちはそれをちゃんと理解し従うことができていた</li> <li>◆基本的生活習慣のほとんどは自分でできていた</li> <li>◆自分から進んで先生のお手伝いをする</li> <li>◆意見の食い違いで喧嘩をしている子もいて</li> </ul>
<p><b>5 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆子どもたちは何をすることも楽しんでいて</li> <li>◆トイレや着替えなど身の回りのことはほぼ自分でできるようになっていて保育者の援助を必要とする子はいなかった</li> <li>◆解決方法はほとんどがジャンケンだった</li> <li>◆先生の声かけに対し子どもたちはきちんと行動できていた</li> <li>◆片付けの時間が近くなったら片付けを始めるし、ご飯の時間になったら当番の子はエプロンと三角巾をすばやく付けてご飯を取りに行っていた</li> </ul>

表3は、子どもの「遊びの様子」を捉えた記述例である。年齢が低いほど「もの」（平均台、ブロック、積み木等）を介した遊びを捉え、年齢が上がるに連れて「ひと」との関わり合いや（多人数、友人の行動等）、社会性（ルール）を持った遊びの展開（自分たちで決めたルール、ルールが成立等）、想像力や文字を含む遊び（犬に見立てて、日本地図等）に着目していた。

表3 ②「遊びの様子」について記述例

<p><b>1 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆水を怖がっていた子は全くプールに入ろうとせず、おもちゃをバケツの水に浮かべて遊ぶ程度</li> <li>◆おのおので遊んでしまっている子が多かった</li> <li>◆繰り返しの遊びが大好き</li> </ul>
<p><b>2 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆平均台やマットで遊ぶこともできていた</li> <li>◆ブロック遊びが人気</li> <li>◆おもちゃを奪い取る</li> <li>◆ブロックや積み木遊びやパズルが大好き</li> <li>◆ブロックや粘土で遊んでいると食べ物を作ったと言って手渡してくれる</li> <li>◆絵本やおもちゃで遊ぶことが大好き</li> </ul>
<p><b>3 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ままごとやブロック遊び、粘土など、いろいろな遊びをしてみんなとても楽しそう</li> <li>◆戦隊ものやアンパンマンが好きみたい</li> <li>◆ブロックでポケモンを作ったり、ケーキやアイスを作っていて</li> <li>◆粘土でもへびを作ったり</li> <li>◆おままごとでも発想が豊か</li> <li>◆その箱の一つに携帯電話があった</li> </ul>
<p><b>4 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆大型のブロックを犬に見立てて遊ぶ女の子</li> <li>◆色やパーツの形などに子どもたちはものすごいこだわりを持っており、目的に向けて熱心に取り組んでいた</li> <li>◆多人数で遊びもできるようになり</li> <li>◆友人の行動を真似して遊ぶことが多かった</li> <li>◆物の独占力が激しくそれが原因でけんかになることもあった</li> <li>◆アニメの話が多いことに気付きました</li> <li>◆自分たちで決めたルールがありそのルールをきちんと守りながら遊んでいた</li> </ul>
<p><b>5 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆日本地図を見ていて、自分が行ったことのある場所を友達と言い合って盛り上がっていた</li> <li>◆自分たちで遊びを見つけて自由に遊ぶ子が多かった</li> <li>◆中には「一人で遊びたい」という子もいてみんなから離れて教室の隅に秘密基地を作って遊んでいる子</li> <li>◆驚くほど器用にレゴを組み立てていた</li> <li>◆積み木を使って車の道路として遊びその遊びを友達と一緒に共有しようと友達を誘っていた</li> <li>◆自分たちで決めたルールが成立していたルールをみんなが理解して決まりを守って遊んでいる姿</li> </ul>

表4は子どもたちの「言葉の獲得」の状況について捉えた記述例である。学生は、各年齢の特徴的な発達を捉えると共に、発達の「個人差」にも気付いている。また、5歳児では、社会的マナーが身についていることや（失礼します、失礼しました）、言葉を介して関係性を修復していける姿（理由をきちんと相手に伝える、分かち合う）も発見している。さらに、学生が伝えようとするのがうまく伝わらない状況もあり（言葉が伝わらない、何言ってるかわからない）、言葉でつながっていくことの難しさにも気がついたことが推察される。

表4 ③「言葉の獲得」について記述例

<p><b>1歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆まだマの行が発音できない</li> <li>◆痲癩を起こしながらも私に何かを訴える二人</li> <li>◆言葉が伝わらない</li> <li>◆私が話しかけることに対して反応してくれる子</li> <li>◆1歳児の子たちとはあんまり会話が成立しなく</li> <li>◆少しずつしゃべり出した子</li> <li>◆トイレに行きたくても言えない子がたくさんいた</li> </ul>
<p><b>2歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆すごくしゃべることができて自分の気持ちを表現でき、伝えることができる子もいれば、あまりしゃべれなくて他の子について行けなかったりと差が多かった</li> <li>◆言語の数が増えるとはいえ、しっかりとコミュニケーションを取るのはなかなか難しい</li> <li>◆想像以上に子ども同士の会話の成立</li> <li>◆「あのおもちゃ私も使いたい」と主張</li> </ul>
<p><b>3歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆何人かの女の子が寄ってきてくれて投げかけたことに対して子どもたちは倍くらいにして答えを返してくれて</li> <li>◆気になったこと全てを質問として投げかけてくれた</li> <li>◆思ったことを素直に言うので正直傷ついた面もありました</li> <li>◆まだまだ言葉遣いが足りない</li> <li>◆「なぜ」「どうして」という疑問を持ち好奇心旺盛</li> </ul>
<p><b>4歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆一生懸命に「先生見て見てすごいでしょ、これ作ったんだよ」と自慢げに話してくる姿</li> <li>◆よく自分のことを話してくれた</li> <li>◆「あのねあのね」と話の間の言葉が多く混じりうまく説明することができない子どもが多い</li> <li>◆まだ言葉の理解ができていない部分があり「お姉さん何言ってるかわからない」と言われた</li> </ul>
<p><b>5歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆5歳児クラスの女の子で、自分の教室とは違う教室に入るときは必ず「失礼します」「失礼しました」と言っていた</li> <li>◆喧嘩をしてしまった子もいましたが、なぜ怒ってしまったのか、何が嫌だったのかの理由をきちんと相手に伝えることで仲直りをしていて</li> <li>◆自分の意見を相手に伝え「これこうしてもいい？」と聞きながら友達と分かち合いながら遊んでいた</li> <li>◆「あのね」から始め、一生懸命に自分の思いを伝えてくる子どもが多く</li> </ul>

表5は、子どもの心身の発達についての記述例である。発達については、子どもが低年齢であるほど記述数が多いという結果を得た。「同年齢」としてクラスが構成されてはいても、月齢によって発達には大きな差があることに気が付いている。そして、年齢が上がるに連れて、食事や活動などの具体的な場面において生じる差について詳細に説明していることがわかった。

表5 ④「心身の発達」について記述例

<p><b>1 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆月例の異なる子どもで、体の大きさやできることに差があり</li> <li>◆歩き方もよちよちしている</li> <li>◆立って歩いているのがたどたどしく</li> <li>◆4月に生まれた子と3月に生まれた子ではこんなにも身体的に変化が現れるのか</li> </ul>
<p><b>2 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆成長段階に差があり、たった数カ月の違いでもここまで差があるのだなと感じ</li> <li>◆2歳児と言っても個人差が本当に大きく</li> <li>◆4月生まれの子とも3月生まれの子どもの体の大きさは一回りも違っていた</li> </ul>
<p><b>3 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆給食を食べることなどには個人差があり、時間を必要とする子どももいて個々の発達の違いが目立っていた</li> <li>◆同じ3歳でもその発達には大きな差がある</li> <li>◆その年齢内でも発達段階にだいぶ差がある</li> </ul>
<p><b>4 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆できることにも個人差があり</li> <li>◆すぐに食べ終わってしまう子もいれば時間が過ぎてでもまだ食べ終わらない子など個人差</li> <li>◆一人ひとりに行動や身体の成長の差があった</li> </ul>
<p><b>5 歳児</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆年齢によって興味を持つものは異なる</li> <li>◆予想していたよりも子どもたちの体が大きい</li> </ul>

以上のように、学生は実習の中で子どもの多様な姿に出会い、単に「子どもと触れ合う」だけでなく、子どもの新たな姿を発見をしたことがわかった。

### 3-2 「学生自身と子どもとのかわり」に見る「ひと」への認識

体験実習を通して学生は、子どもの動きや遊びの様子、心身の発達や言葉の獲得などについて新たな発見をしていたことがわかった。さらに、記述で多く見られた点は、学生自身が子どもとのかわりを通して得た気づきである。ここでは、配属クラス別による子どもとのかわりの様相を詳細に見ていきたい。

まず、1歳児に配属された学生の記述例は表6の通りである。

表6 1歳児配属クラスの記述例

- ◇嬉しそうに笑ってくれた
- ◇以外とすぐに受け入れてくれた
- ◇私の方に来てくれる子
- ◇2日目は私を見ながら一緒に踊り、お歌を歌ってくれて
- ◇子どもたちは思っていたよりも近寄ってきてくれて
- ◇絵本を読み終わった後、折り紙を出す子どもはとても喜んでくれた
- ◇子どもたちがだんだん私を受け入れてくれたのか近寄ってきてくれたり、遊びに誘ってくれたり、本を読んで欲しいと言ってきたり
- ◇初日よりも近づいてくれたり遊んでと甘えてくれたり

1歳児配属の学生は、「〇〇してくれた（くれる・くれて）」という表現が多く、子どもからのかかわりを主とした様子が伺える。また、「2日目は」、「だんだん」、「初日より」というように、時間的経過の中で少しずつかかわりを持つようとする様子を読み取れ、さらに、「以外と」、「思っていたより」という記述からは、乳児のかかわりは予想以上に可能であったことに気付いたのではないかと思われる。

2歳児に配属された学生の記述例は表7の通りである。

表7 2歳児配属クラスの記述例

- ◇徐々に子ども達も私とのコミュニケーションを受け入れてくれるように
- ◇めげずに話しかけているとだんだんと心を開いてくれた
- ◇話を聞いてあげれば満足げに喜んでくれたり
- ◇自分から話しかけると最初は緊張していた様子だったが子どもたちもだんだんと打ち解けてきてくれた
- ◇話しかけると素直に返事をしてくれたり
- ◇名前でそれぞれの子に呼びかけることができ、子ども達は反応してくれ
- ◇話しかけても聞いていない振りをしたり逃げてしまったり
- ◇私が子どもたちに話しかけてもそっけない返事ばかり
- ◇最初は私が声をかけると知らない人が来たと戸惑う子ども
- ◇話しかけてみても答えてくれる子どもや答えてくれない子ども
- ◇違うこと（遊び）に集中して見もしない子



2歳児配属の学生は、1歳児配属の学生と比べると、「コミュニケーション」, 「話しかける」, 「聞いてあげる」, 「呼びかける」, 「声をかける」などの記述から、学生から子どもにかかわっていかうとする姿が読み取れる。また、「徐々に」, 「めげずに」, 「最初は」, 「だんだんと」という時間の経過と共にかかわりを深めようとしている点は1歳児と類似する。しかし、2歳児配属学生は、学生自らかかわろうと努力が見られる半面、子どもが、「聞いていない振り」, 「逃げて」, 「そっけない返事」, 「戸惑う」, 「答えてくれない」, 「見もしない」というように、かかわりが成立しなかったことも述べている。

3歳児に配属された学生の記述例は表8の通りである。

表8 3歳児配属クラスの記述例

◇子ども達がみんな一生懸命、歌や言葉を贈ってくれた
◇パズルの時には一緒にパズルを作ってくれる子
◇ブロックで作ったものを見せに来る子やくれる子
◇ホースで水をかけてあげたらとても喜んで
◇名札に興味を持ってくれた
◇カニのポーズを決めるときにしっかり決まっています私に見せてくれた
◇私が本を読んでいるときに子どもたちが真剣に聞いてくれていた
◇目を合わせれば <u>笑ってくれる子</u>
◇私から話しかければ <u>恥ずかしがりながらも答えて</u>
◇初めは心を開いてくれなかった子どもが次第に <u>子ども自ら声をかけてくれるようになった</u>
◇何度も私から話しかけてみると <u>少しだけ一緒に話したり遊んだり</u>
◇まったく興味を示してくれない <u>園児のところへ行くと少しですが家族のことや自分のことを紹介するように話してくれた</u>

3歳児配属学生は、子どもからのかかわりが見られるものの、「歌」、「言葉」、「パズル」、「ブロック」、「名札」というように「もの」を介して学生からかかわっていかうとする姿を捉えることができる。その意欲は、「目を合わせれば」, 「私から話しかければ」, 「園児のところへ行くと」という記述からも明らかであり、その働きかけの結果、「恥ずかしがりながらも」, 「少しだけ」という状況の下、「笑ってくれた」, 「答えてくれた」, 「一緒に話したり遊んだりした」, 「家族のことや自分のことを話してくれた」というように、かかわることができた結果を喜びとしていることが読み取れる。

4歳児に配属された学生の記述例は表9の通りである。

表9 4歳児配属クラスの記述例

- ◇四方八方から子どもたちが寄ってきて
- ◇「お姉さん先生」と呼んでくれて
- ◇帰り際には「もっと遊ぼう」や「もう帰っちゃうの?」「また遊ぼうね」と言ってくれた
- ◇自己紹介をすると子どもたちはすぐに私の所へ駆け寄ってきてくれた
- ◇子どもたちから「次は〇〇だよ」と言ってくれたり、「こうするんだよ」と指摘してくれたり、今日やることを教えてくれたり、間違いを教えてくれたり
- ◇今人気のキャラクターのクイズを出してきたり、身近な話をしてくれた
- ◇一人の女の子が「先生は私の隣でご飯食べてね。だから先生の水筒持って行ってあげる。」と走ってきてくれたとき、違う男の子が「じゃあ、明日はこっち来てね」と話しかけてくれて
- ◇先生が話しているときに話してしまう子がいたので注意したのですが、なかなか聞いてもらえなかった
- ◇すぐに泣いてしまう子だったので親近感がわいたので話しかけたりしていたけれど、すぐにどこかへ行ってしまい
- ◇「ポケモンいえるかな?」が歌えるかと言われたときには困ってしまった
- ◇話しかけても応答してくれない子
- ◇人見知りをする子が多かったみたいで近づこうとしてくれませんでした

4歳児配属学生は、「お姉さん先生」、「もう帰っちゃうの」、「次は〇〇だよ」、「じゃあ、明日はこっち来てね」等、子どもから発せられた具体的な言葉を示しながら、子どもとかわわっていった様子を示している。また、学生は、「先生が話しているときに話してしまう子がいたので」、「すぐに泣いてしまう子だったので」というように状況を見て「注意した」、「話しかけたりした」と判断、行動しているものの、結果として「聞いてもらえなかった」、「どこかに行ってしまう」、「応答してくれない」など、かわわりがうまくいかなかった様子も示されている。このことから、体験実習ながらも「保育者」として意識しながら子どもとかわわったのではないかということが推察される。

5歳児に配属された学生の記述例は表10の通りである。

表 10 5歳児配属クラスの記述例

◇「お姉さんこっちに来てよ」「一緒に遊ぼう」と声をかけてくれた
◇後ろから走ってきて <u>抱きついて</u> くれたり、 <u>手を離さない</u> でいてくれたりもした
◇紙芝居を読んだら予想以上に反応が良く
◇私から子どもに話しかけたら <u>笑顔</u> で話しを返してきてくれた
◇二日目になってもまたその人形で遊ぼうと言ってきてくれた
◇子どもたちは私に興味を持ってくれたのか「お姉さん来て」と <u>笑顔</u> で私を呼んでくれ
◇ほとんどの子どもは「見て！」と自分で作ったブロックや絵などを <u>自慢げ</u> に見せてくれた
◇Yちゃんが「お姉さんここだよ！」と教えてくれました。
◇折り紙で作った動物や飛行機などをプレゼントしてくれた
◇一部の子どもたちは近づいてきてくれた
◇私に話しかけてきてくれる子はあまりいなかった
◇話しかけても <u>答えてくれない</u> 子どももいた
◇話しかけてもボーッとして <u>返事をしてくれない</u> 子もいたが、すぐに走り回ったり元気に歌を歌っていた
◇子どもたちは自分の好きなように遊んでいて実習に来ている私たちは <u>眼中にありません</u> でした
◇自分から中に入ろうとして声をかけても <u>反応してくれず</u>

5歳児配属学生は、子どもから「お姉さんこっちに来てよ」, 「お姉さん来て」, 「お姉さんここだよ」と声をかけられたり、「抱きついて」, 「手を離さない」, 「笑顔で」, 「自慢げに」という記述から、子どもが表現力豊かにかかわっていた様子を読み取ることができる。しかし一方で、「答えてくれない」, 「返事をしてくれない」, 「眼中にない」, 「反応してくれない」などというように、うまくかかわることができずに戸惑いを示す学生もいた。

以上が、配属クラス別による学生と子どもとのかかわりについて記述された代表例である。大学に入学して間もない時期における初めの実習であったためか、学生は子どもからのかかわりを「受ける」立場を取っている傾向が見られた。その中で学生は戸惑いながらも子どもとのかかわりを試み、子どもの特性や個性、意外性などを知ることとなった。学生の記述から、「子どもとかかわる」ということは、「楽しい」ことだけではなく、かかわりの「難しさ」もあるということを実感したことが伺えるのである。

#### 4. まとめ

体験実習後に提出された課題レポートから、学生は実習を通して子どもの発達特性に気付く

と共に、かかわってみようとチャレンジしていたことがわかった。学生から子どもに対して積極的にかかわろう、保育者の立場で応えていこう、あるいは、時間をかけて少しずつかかわり歩み寄ろう、ものや事象（こと）を介してかかわろう、と様々なチャレンジをするのだが、子どもは学生の気持ちに応えるどころか、突然にやって来た学生から逃げてしまう、無視をする、返事をしないなど、かかわることができない状況が生じてしまう。このような子どもの行動に学生は「戸惑い」を感じている。果たしてこのような戸惑う場面を想像して学生は実習に臨んだであろうか。おそらく、学生が抱く保育のイメージとは別の結果を得たのではないだろうか。学生にとってこのような予想外の結果から、自身が思い描いている以上に「多様な子どもがいる」という認識を持ち始めたことが推察されるのである。こうしたかかわりの様相を図1に示す。

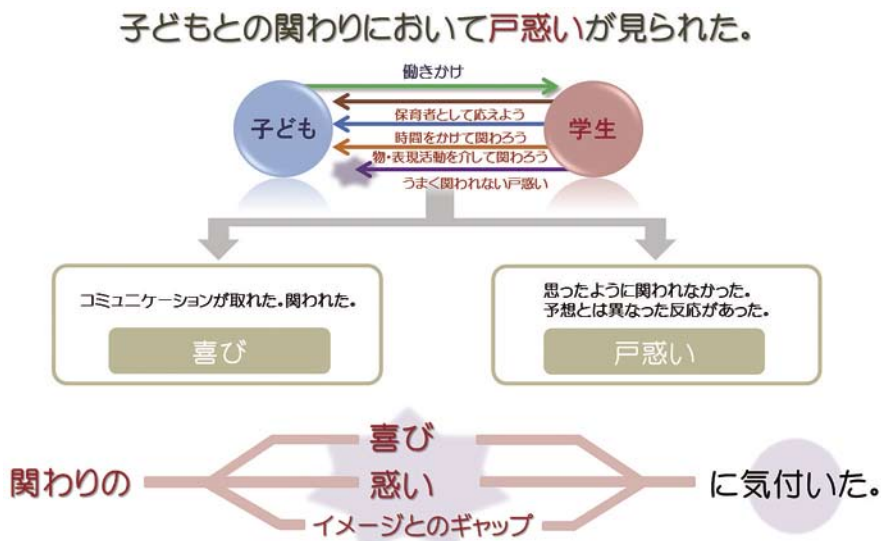


図1 子どもとのかかわりの様相とその結果

入学して4ヶ月、学生は初めて保育の場に足を踏み入れた。体験実習事前指導としては、まずは子どもと触れ合って欲しい、保育の場とはどのような所なのか感じ取って欲しいという願いから、実習での着眼点を「子どもと触れ合った感想」、「保育者の仕事」、「これからの学び」の3点に絞って行った。しかし、学生の記述からは、子どもの多様な姿が具体的に示され、触れ合った喜びと共に戸惑いも詳細に示された。この両面を感じ取るということは、「子ども」という大枠で捉えていた子ども像を崩し、「多様な存在としての子ども」を感じ取った可能性

が高いことが示唆される。「多様なひと」を感じ、「多様なかわり」をしていくことのできる保育者の養成が求められている今日、その多様性に触れた本体験実習は、保育者養成の初年次専門導入教育のプログラムとして有効性が高いことが推察されるのである。

2011年度の体験実習の結果を受け、2012年度の体験実習もすでに終了した。2012年度は事前指導や課題レポートの内容、附属保育園との連携体制等を改善しながら取り組んだ。今後は、課題レポートの前年度比較を行いながら学生の学びの傾向を明らかにすると共に、プログラム内容の変更や連携体制のあり方が、学生の学びにどのような影響を及ぼしているのかを検討することで、2013年度の体験実習へ向けたプログラム構成へのヒントを得たいと考えている。

### 参考資料

1. 箕輪潤子他 (2012)「保育者養成における『ひと・もの・こと』に出会う体験型学習プログラムに関する実証的研究 (1) —体験型科目「幼児教育体験学習」を通じた教員の意識変化—」川村学園女子大学紀要第23巻第2号
2. 菅井洋子他 (2012)「保育者養成における『ひと・もの・こと』に出会う体験型学習プログラムに関する実証的研究 (2) —学生の「振り返り」記録からみる「ひと」との出会いの広がり—」川村学園女子大学紀要第23巻第2号
3. 草信和世他 (2012)「保育者養成における『ひと・もの・こと』に出会う体験型学習プログラムに関する実証的研究 (3) —保育の理解を進める教育方法の検討—」川村学園女子大学紀要第23巻第2号
4. 近藤千草他 (2012)「保育者養成における『ひと・もの・こと』に出会う体験型学習プログラムに関する実証的研究 (4) —「こと」(野菜と藍の栽培)から「ひと」へのつながり—」川村学園女子大学紀要 第23巻第2号
5. 葉山登他 (2012)「保育者養成における『ひと・もの・こと』に出会う体験型学習プログラムに関する実証的研究 (5) —初年次教育プログラムにおける工芸体験プログラムの検討—」川村学園女子大学紀要 第23巻第2号
6. 「保育者養成における『ひと・もの・こと』に出会う体験型学習プログラムに関する実証的研究」報告書 (2012)
7. 厚生労働省 保育士養成課程等検討会 「保育士養成課程等の改訂について(中間まとめ)案」平成22年3月9日

### 追記

本研究は、川村学園女子大学学内教育研究奨励費の助成を受けてなされた。なお、本稿の一部は、日本保育学会(2012)で発表した。